

滞日外国人家族に対する多文化ソーシャルワークに関する研究

ライフデザイン学部 生活支援学科 子ども支援学専攻

南野 奈津子 教授 Natsuko Minamino



研究概要 滞日外国人、特に移住外国人女性や子どもの福祉課題について、日本の制度や社会福祉サービスの実情を踏まえつつ、求められる多文化ソーシャルワークの研究を行っている。

研究シーズの内容

滞日外国人は、様々な社会的不利を抱える背景には、日本の法制度が近年の移住者に対応し得るものになっていないこと、支援人材の養成が遅れていることなどに加え、文化的な壁、日本国内の福祉課題、さらには日本国内での外国人コミュニティの形成状況などの多様な要素が影響を与えている(図1)。

それぞれのライフステージにおいて起きる福祉課題の中でも、子どもや女性が抱える不利や排除への対処は喫緊の課題である。福祉課題を抱える外国人女性に対する調査では、DV被害を有する率の高さのみならず、DV被害経験を有する女性において「配偶者が日本人」「児童虐待問題を有する」「最終学歴が小・中学校」といった課題を抱える傾向が示された。移住外国人女性においては、日本人との家族形成が移住者としての社会的脆弱性を緩和するとは限らないことを踏まえ、女性のネットワークや社会生活知識の獲得支援が重要であることを明らかにしている(図2)。

親の課題は、子どもの各ライフステージにおける困難を生んだり、アイデンティティの確立を困難にしたりする状況をもたらす(これらの実情は「外国人の子ども白書」(明石書店2017)において詳細が描き出されている)。多様な文化背景をもつ子どもや家族に対し、個別的な支援のみならず、地域で様々な人材や組織が関与しながら支える体制作りが重要課題である。これらの諸課題について、調査をもとに研究を進めている。

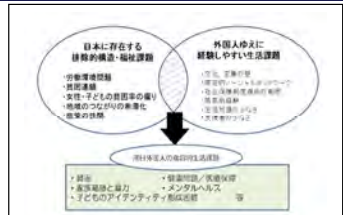


図1 外国人の生活の脆弱性

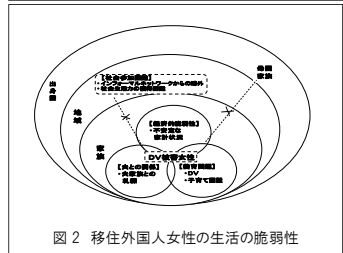
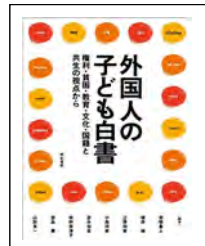


図2 移住外国人女性の生活の脆弱性



研究シーズの応用例・産業界へのアピールポイント

上記の調査研究の知見は、福祉分野のみならず、保育、教育、医療、保健、及び多文化共生推進に関連する領域に関わる関係者がどのように外国人の生活保障を行い得るかを考える材料になるといえます。

特記事項(関連する発表論文・特許名称・出願番号等)

- 『外国人の子ども白書』(2017年 共編著) 明石書店
- 『滞日外国人支援の実践事例から学ぶ多文化ソーシャルワーク』(2011年 共著) 日本社会福祉会監修、中央法規。
- 「ドメスティックバイオレンス被害を有する移住外国人女性の複合的課題の研究」(単著 2016)『日本保健福祉学会誌』23(1),15-23